

スペシャル・オリンピックス

「医学がどんなに進歩しても、1%くらいの割合で生まれてくるという知的発達障害の人たち。この人たちは、その周りの人たちに優しさを教えるために神様からプレゼントされた人たちである」

スペシャル・オリンピックとは・・・

知的発達障害のある人びと（アスリート）に、年間を通じてさまざまなスポーツトレーニングプログラムと競技会を提供する非営利団体。活動はすべて民間のボランティアの力と善意の寄付によって支えられている。国際本部はワシントンD.C.にあり、世界145カ国が加盟、125万人のアスリートを55万人を超えるボランティアの活動が支えている。

日本事務局：〒860-0845 熊本市上通町1-24
 ビアーレビル3F
 Tel: 096-352-4000 Fax: 096-352-1820

身体障害者のための国際競技大会はパラリンピックとしてよく知られている。それとは別に知的発達障害者のためのスポーツ大会として、厚生省主催による国内大会「ゆうあいピック」と、世界中のボランティアによって運営される「スペシャル・オリンピックス」がある。

知的障害のある人たちは歴史的に隠されて育てられたという過去がある。が、彼らは周りが少しサポートするだけで驚くほどの力を発揮するという。絵でも音楽でもいいが、スポーツを通してやる気と勇気を育てようというのがスペシャル・オリンピックスである。スポーツをしていて、今までできなかったことがふとできるようになる瞬間を、だれでも経験したことがあるだろう。そこでうれしくなってまたやろうという気になる。知的障害のある人たちがスポーツを通して経験できる世界の広がりには計り知れない。今回はスペシャル・オリンピックス日本の会長を務める細川元首相夫人細川佳代子さんにお話をうかがった。

★ ★ ★

Q. スペシャル・オリンピックス(SO)にかかわるようになったきっかけは？

7年前に、熊本の中村勝子さんという元体操の先生とダウン症の女の子が、世界大会で銀メダルをとって帰ってきました。中村さんはSOの意義を身をもって体験して、ぜひこれを日本に広めたいと思い、私もボランティア活動をやっていたご縁でお手伝いをするようになりました。SOの基本哲学や実践活動を教えていただいて、今日本に一番欠けているものがここにある、これを広めたら日本の社会が変わる、これは単なる知的障害者のための活動というだけではなく、まさに世直し運動になると思ったのです。

Q. SOはどのようにして生まれたのですか。

SOを始めたのは故ケネディ大統領の妹ユニス・ケネディ・シュライバー夫人です。今でこそ障害者福祉先進国のアメリカですが、40年前は知的障害者が家族の中にいたら隠す、日本で言う座敷牢というような時代だったようです。ケネディ家には、大統領の妹でローズマリーという知

的障害をもった方がいましたが、大統領の父上はケネディ家の恥ということで娘を障害者として認めず、手術をすれば治ると言って手術を繰り返したので最後には廃人になってしまったそうです。それに対して、もう一人の妹であるユニスはお兄さんが大統領になったとき、「あなたもローズマリーのことを国民に隠すつもりですか。それではローズマリー・ケネディという一人の人間の尊厳、人権を否定することになりませんか。彼ら一人一人の命を、神様からいただいたものとして認めて受け入れ尊厳を守る、そういう社会を作るのが大統領の仕事ではないですか」と言ったんです。その勇気ある言葉でケネディ大統領はローズマリーのことを初めて国民に話しました。それからユニスは自宅の庭を開放して、それまで隠されていてスポーツをするチャンスなど絶対になかった知的障害をもった方々と、ボール遊びをしたりプールで泳いだりしたんです。そうしたら、スポーツの効果はすぐくて、何もできないと思われていた彼らが、教えればできる、それを楽しむ、どんどん上手になっていく。顔も変わり、元気になり、いろいろな面で非常に成長することがわかって、これをもっと広げていこうということになりました。

Q. SOの基本精神は「参加者すべてが勝利者」だそうですね。

はい。どんな子でもその子なりにがんばった分だけ誉めてあげます。ふつうのオリンピックでは、メダルへの期待のプレッシャーで青くなったりしますが、SOではメダルはいっぱい取れます。予選は、障害の程度がそれぞれ違うので細かくクラス分けをするためのものです。10%方式といって、その人の能力をチェックして、10%以内に入る人を同じ組にします。1組は3～8人と決まっていますので、そのレベルに9人いたら4人と5人に分けて決勝を行います。自然メダルの数は増えます。またSOでは表彰台は8位までなので全員がのって、最下位の子でも得意げにこぶしを振り上げたりしています。みんなの顔が笑顔で輝きます。

例えばスピードスケート種目に10m走というものもあって、短いですがね、10mって。それで

も転んでは起き、転んでは起きして何分もかかる子がいます。その子は1年前にはスケート靴をはいて床を歩くこともできなかった、それが頑張って氷の上に立つことができ、初めは必死にコーチの手を握りしめていたのがだんだん1人で歩けるようになる。触って起こしたら失格になるから大会役員もさわれない。「頑張れ！」と観衆が総立ちで応援します。それでゴールをすると、その子がそこまでくるのにどれだけの道のりがあったかをみんなで考えて、心から拍手を送るんです。それは感動的です。

Q. 大会はすべてボランティアの手で？

そうです。昨年80カ国から約2000人のアスリートを集めて、冬季大会がカナダのトロントで行われました。オリンピックとあまり規模は変わりませんが、それが全部ボランティアの手で行われるんです。トロントでは6000人募集したら1万人以上の応募があって断らなければなりませんでした。その会長は地元の37歳の銀行マン。日本ではみんなお役人さんでしょう。銀行はそれを名誉として、トロントで行われるとわかったときから毎年1カ月ずつ、準備のために彼に有給休暇を与えたんです。そういう風に社会全体がボランティア活動に熱心なので、こういう大会が可能になるんですね。

だからそのパワーはすごい。ほんとうにみんなが楽しんでいるので盛り上がり方が違います。日本では、形式的に見た目は素晴らしいし、全部時刻表通りにことが運ぶ。ところがSOはもういい加減。みんなボランティアなので連絡が悪くて待てど暮らせど迎えはこない、出発するまで選手の宿泊ホテルもわからない。それでもみんなボランティアだから文句は言えない。不平不満を言うより、自分に何ができるか、何をすべきかを考えて動く、みんなで作り上げていく、だから一人一人が主役です。みんなとにかく楽しんでいるからいいんです。

Q. 大会以外の日常のプログラムは？そしてボランティアの役割は？

各地で週末にさまざまなスポーツプログラムを実施しています。



スペシャル・オリンピックス日本会長細川佳代子さん

私たちの日本は、障害者を施設などに入れて隔離してしまいます。親が頑張っても社会が受け入れようとしない。劇場に行ったら二度と来ないでくださいと言わんばかり、レストランでもご遠慮くださいと言われる。社会に理解や思いやりがないから親はどこにも連れていけなくなり、自宅と学校あるいは作業所の往復で、言葉を交わす人間も親と先生ばかり。SOのボランティアはそういう人たちを毎週末、サッカーしましょう、水泳しましょうといろいろなトレーニングプログラムに誘いだすんです。SOを知ったアスリートは毎週水泳だ、ボウリングだとかけもちでやっています。一緒にスポーツをしているうちに本当に両方が学び合って、みるみるうちにイキイキとしてきます。できる種目も増えてきましたが、まだまだボランティアの数が必要です。ボランティアがそろって初めて成り立つ活動なんです。

Q. ボランティアが学ぶことも多いわけですね。

コーチをしようという人は最初、教えてあげようと張り切ってやってくるんです。ところが教えられるのは自分の方だったとみなさんおっしゃいます。ダウン症や自閉症、いろいろな出産期の異常で知的障害を負った人たちと一緒にスポーツをしていると、知的障害があるのは実は自分の方なんだと自覚するんですね。私たちは嘘をつく、何かあったときには自分の利益を考えて損になることは避ける、一方でこう言って裏では別のことを平気で言う。これらはみな知的障害だと思うんですね。その点彼らは純粋ですよ。優しく素直で正直です。どちらが知的障害か本当に考えさせられます。

今の日本は、とにかく能力のある子、偏差値が高い子がいい子になっている。社会に出れば学歴社会で、効率や能力が評価され、経済第一、利益第一の社会になってしまった。日本の価値観のルートから外れた子が、いわゆる非行や恐ろしい事件を引き起こしている。そんななかで、日本の福祉行政によって隔離収容されてしまった、知的障害をもった人たちを社会の中に引き出し、その子たちと何のご縁もなかった一般の市民たちとの交流の場をつくらう、彼らの本当の姿を理解することによって偏見や差別



第2回スペシャル・オリンピックス日本 国内大会表彰式

を取り除き、共に成長し、共に生きていこうというのがこの運動なんです。

Q. 日本の教育の問題になりますね。

金髪で頭のまん中にしか髪がない青年がコーチとしてやってきて、みんなでぎょっとしたこともあります。今では彼は黒いふさふさの髪になって目つき顔つきまで変わって、アスリートに最も人気のあるコーチです。彼は、自分は今まで間違っていた、親不孝の限りを尽くしてきた、それですべては親のせい、学校のせい、社会が悪いと全部人のせいにしてきた。誰も自分のことを認めてくれなかったけれど、僕を認めてくれるアスリートに出会って、毎週グラウンドで彼らに会えることが僕の生き甲斐になった。頑張って、頑張って、もうどこまでも頑張ろうと努力する姿を見て、自分はこれまでに一度もあんなに努力をしたことはなかった、ということを読まれたと言います。今の日本の偏った価値観からはずれた人たち、無気力、無関心、無感動という若者たちがアスリートに出会うと、人間にとって何が一番大事かという答えを自分で出すようになる、これはすごいことだと思います。

日本は強者の世界で弱者に光があたらないし、感覚的に言って、そういう基本的な心のあたたかさ、思いやりに欠けているような感じがします。いびつな価値観でがんじがらめになったから、教育の荒廃がここまで進んでしまったのではないのでしょうか。その子もっている何かしらの能力を、みんなで励まして引き出すような社会・家庭教育だったら、こんなにおかしな社会にはならなかったと思います。

Q. 福祉のあり方という観点から日本はどうですか。

ハードの面では結構進んでいますが、ソフトの面、心の面ではまだまだ遅れていますね。やはり一番の障害者福祉先進国はアメリカだと思います。障害者自立支援法という法律があり、障害ゆえに差別を受けた場合、それは法律違反になります。障害をもっている人ももっていない人も、同じ一人の人間として学校に行って、



バスケット決勝戦。一生懸命闘いながらも、チームメイトへのいたわりを忘れないアスリートたち。

社会で仕事をして、余暇を楽しんで、ちゃんと自立して生きていける社会を作るのがアメリカの法律の目的です。障害者が街に出て働いている姿がふつうに見られます。

知的障害をもった人たちは、人口の約1%は生まれてくると言われています。日本では100万人強ということになりますが、衛生環境や母親の教育などのおかげで実際はもっと少ないでしょう。厚生省にいわれる障害者手帳のような届け出があるのが41万3000人だそうです。日本ではまだ隠す意識が強い。隠されている数というのは全くわからないそうです。ですが夢中でこの運動に協力してくださる親御さんも増えていきますから、これからですね。

Q. ボランティアに興味があってもまず何をしたらいいのか、その第一歩が踏み出せない。

そういう方々にSOという活動があることをどうしたら知ってもらえるかという、やはりマスメディアしかない。ところが今までほとんど扱ってくれなかった。やはり日本の社会の封鎖性でしょうか。マスコミがナースです。親の方も、うちの子を写さないで、子どもの顔をテレビに出さないでと注文をつける人もいます。

みんな相手が知的障害をもつというだけで尻込みしがちです。どう対処していいかわからない。それほど、社会に知的障害者が出ていないということです。SOでは、自分が楽しむということを第一に考えて、とにかく一度足を運んでいただきたいと思っています。いろいろな人に出会って人生観が変わって、そして揉まれていくうちにみんな豊かな気持ちになって、いわゆる共生、みんなで支え合って共に生きていこうという理想の社会ができるのではないのでしょうか。とにかく来てみてくださいとお願いしているんです。見てくださればわかりますと。

★

来夏の夏、米国ノースカロライナ州でSO夏季世界大会が行われる。世界大会に選手を送り出す条件ともなっている国内大会は、記録的な大雨が関東以北の各地で大きな被害をもたらした今年の8月末、神奈川県平塚市の東海大学湘南校舎で行われた。アスリート300名の他に、大会役員、コーチ、一般ボランティア約2400名が参加した。大会の当初の予想を上回る、多くのボランティアが集まった今大会。あいにくの天候にもかかわらず、多くの人々の熱い声援と、アスリートたちの頑張りが一つになって大会を盛り上げた。